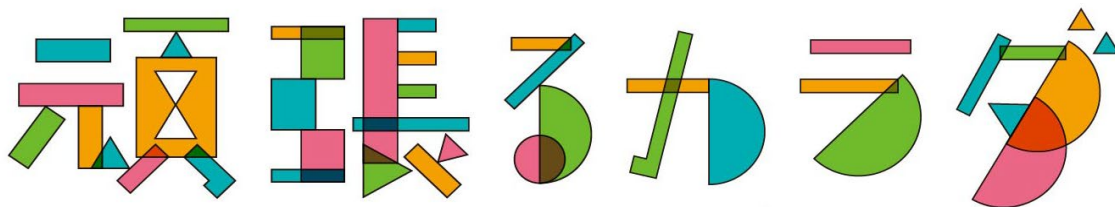


第39回 自然科学研究機構シンポジウム



★アンケートフォームからのご質問と回答

Q1:なぜ冬眠は丸まってしているのでしょうか。また、丸まらない冬眠をする動物もいるのでしょうか。

【山口先生からのご回答】

丸まって表面積を小さくすることで、体熱の損失を防いでいると考えられています。丸まらない冬眠する哺乳類は私の知る限り見つかっていないと思います。

Q2:嫌なことを避けるのは、生きるために必要な能力であることが分かりました。解決方法が2つ紹介されていたが、一般の人にはまだ難しい。頑張れないことで自己肯定感が下がってしまう生徒がいるが、何か手はないでしょうか。

【小泉先生からのご回答】

「頑張れない」ことで自己肯定感が下がってしまう生徒さんへの即効的で万能な解決策がまだないのは、現在の脳科学や心理学の限界でもあり、私たち研究者も強く問題意識を感じているところです。

ただ、そうした状況に直面している生徒さんに対して、一つ共有したい視点があります。それは、「頑張れない」原因が必ずしもその生徒個人の内面や努

力不足にあるわけではなく、現在の学校システムや環境とのミスマッチにある可能性も十分ある、という視点です。現在の教育システムは多くの場合、「誰にでも合う単一のやり方（一律的システム）」を前提としており、生徒一人ひとりの脳の多様性や学習方法の違いを反映していません。そのため、ある環境でうまく頑張れないとしても、それはその生徒個人の能力不足や努力不足を意味しないかもしれません。

現在の環境とのミスマッチでうまくいかないことを「アンラッキー」と捉えることもあるかもしれませんが。しかし、少し視点を変えて未来を考えてみると、今の苦しい経験が、その人ならではの鋭い感性や問題意識となって、将来、他の人にはできないような特別な役割を担う可能性があります。環境とのズレや葛藤を経験することは、実は新たな教育や社会システムを考える際に必要な創造性や独自の視点を育むきっかけになるかもしれません。実際、過去に活躍した多くの人が、若い頃に感じた苦しさを原動力として、社会にポジティブな影響を与えてきました。

もちろん、未来の可能性を語っても、現在の苦しさがすぐに解消されるわけではありませんが、生徒自身が「うまくいかない原因は自分だけではないかもしれない」と気づくことで、自己肯定感を守ることに少し役立つのではないのでしょうか。私たち研究者も、こうした課題に対してより具体的な手立てを提案できるよう、引き続き研究を進めていきます。